

なごみつつうしん

発行日：平成 27 年 5 月 25 日（第 5 号）

発行：島田療育センターはちおうじ

もがけばもがくほど深みにはまっていく蟻地獄のような世界。人はときにそんな世界に迷い込んでしまいます。でも、ちょっとしたきっかけで世界は変わっていきます。そんな話を紹介します。

所長 小沢 浩

「この子を頼む」

島田療育センターはちおうじが開院してしばらくして、成人のダウン症で知的障害の K さんが外来にやってきた。お姉さんが介助し、車いすを押して入ってきた。お母さんは一〇年前に亡くなり、そのときお母さんがお姉さんに残した最期の一言が

「この子を頼む」

であった。お姉さんは、その一言を忠実に守り K さんに尽くした。K さんは、道路を歩いていて車で怖い思いをして以来、作業所に行くことができなくなり、ずっとひきこもり状態であった。家でも、お姉さんが手を引かないと歩けない、食事もお姉さんといと食べない、お風呂も連れて行かないと入らない、気に入らないことがあるとその場で暴れるなどの行動の毎日だった。お姉さんは、睡眠も妹さんに合わせ、午前 3 時ごろ寝ていた。「でも意外に、外出ではりきっているとすぐ準備をするんです。そのときは速いんです。」お姉さんの一言を聞き、私は改めて二人をみた。お姉さんは、お化

粧もせず、髪も乱れていて、疲労の色があまりありと出ていた。

K さんはといえば、ずっと背を丸めうつむいているが、ときどき

上目づかいにこちらを窺（うかが）っていた。目が合うとあわててうつむく。しっかり話は聞いているようである。

私は K さんの前でお姉さんに二つの提案をした。

「一つは、ほおっておくこと。そうしたときに、どういう行動をとるか観察しましょう。」それを聞いたお姉さんは、

「でも、食事をとらなかったら？お風呂に入らなかったら？床で暴れてそのままにしておくところで寝てしまうんです。」

私の答えは簡単である。

「昼食べなくても死にやしません。おなかですいて自分で夕食を食べると思いますよ。お風呂はしばらく入らなくても死ぬことはありません。床で寝て、いやだったら自分で布団にくるでしよう。床で寝ても構い

ません。それがどうなるか確認しましょう。」
それを聞いたKさんは、突然激しい咳をした。しっかり聞いてくれているようである。それからもう一つの提案をした。

「お姉さん自身の人生を考えましょう。お母さんの遺言の意味は、今の形でないと思います。」

お姉さんは、はっとして、私をみた。

それから理学療法が開始された。歩行可能なKさんに、本来は理学療法の適応ではないのだが、理学療法士さんをお願いしたのは、「やる気を育てること」であった。理学療法士さんは、それは一生懸命に関わってくれた。そして、一か月後の外来。私はとにかくびっくりした。お姉さんはお化粧をしていて、それはきれいで輝いている。Kさんの背中が少し丸みがへり、歩くのが速くなってきていた。それからみるみる二人は変わっていった。毎回、理学療法士さんが報告してくれる。そして、なんとKさんは、作業所に通うことが決まったのであった。お姉さんも仕事が決まった。もう、5カ月で島田療育センターはちおうじを卒業になる。お姉さんの早い決断にこちらが戸惑ってしまう。でも、お姉さんは言った。「最近、料理を手伝ってくれるんです。前に進んでみます。きっかけを作ってください、ありがとうございました。」

人は、みんな一生懸命である。でも、一生懸命なゆえに、まわりがみえなくなってしまうこともある。それを責めることなく、ともに寄り添い、道を切り開いていくことが大切なのだということをお姉さんから教わった。



『奇跡がくれた宝物—いのちの授業—』
小沢浩著、クリエイツかもがわより

